

〔博士（後期）課程〕

授業科目及び講義要項

授業科目・単位数及び担当者一覧 [博士（後期）課程] 【2016（平成28）年度以降入学生】

授業科目		単位数	担当者	備考
組織経営関連科目	経営学原理特殊研究Ⅰ	2	澤野 雅彦	
	経営組織論特殊研究Ⅰ	2	大平 義隆	
	経営組織論特殊研究Ⅱ	2		
	経営組織論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	経営組織論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	経営戦略論特殊研究Ⅰ	2	今野 喜文	
	経営戦略論特殊研究Ⅱ	2		
	経営戦略論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	経営戦略論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	国際経営論特殊研究Ⅰ	2	菅原 秀幸	
	国際経営論特殊研究Ⅱ	2		
	国際経営論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	国際経営論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	企業行動論特殊研究Ⅰ	2	石井 耕	
	現代企業論特殊研究Ⅰ	2	石嶋 芳臣	
	現代企業論特殊研究Ⅱ	2		
	現代企業論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	現代企業論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	企業と社会特殊研究Ⅰ	2	春日 賢	
	企業と社会特殊研究Ⅱ	2		
	企業と社会特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	企業と社会特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅰ	2	伊藤 友章	
	マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅱ	2		
	マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	流通システム論特殊研究Ⅰ	2	佐藤 芳彰	
	非営利事業論特殊研究Ⅰ	2	菅原 浩信	
	非営利事業論特殊研究Ⅱ	2		
	非営利事業論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	非営利事業論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	財務会計論特殊研究Ⅰ	2	高木 裕之	
財務会計論特殊研究Ⅱ	2			
財務会計論特殊研究Ⅲ	4	2年次開講		
財務会計論特殊研究Ⅳ	4	3年次開講		
管理会計論特殊研究Ⅰ	2	内田 昌利		
経営情報論特殊研究Ⅰ	2	天笠 道裕		
経営情報論特殊研究Ⅱ	2			
経営情報論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講	
経営情報論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講	

(次項につづく)

(前項より)

	授業科目	単位数	担当者	備考
組織情報関連科目	情報コミュニケーション論特殊研究Ⅰ	2	福永 厚	
	情報コミュニケーション論特殊研究Ⅱ	2		
	情報コミュニケーション論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	情報コミュニケーション論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
組織心理関連科目	組織心理学特殊研究Ⅰ	2	増地あゆみ	
	組織心理学特殊研究Ⅱ	2		
	組織心理学特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	組織心理学特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	行動意思決定論特殊研究Ⅰ	2	鈴木 修司	
	行動意思決定論特殊研究Ⅱ	2		
	行動意思決定論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	行動意思決定論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	学習心理学特殊研究Ⅰ	2	佐藤 淳	
	学習心理学特殊研究Ⅱ	2		
	学習心理学特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	学習心理学特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	発達心理学特殊研究Ⅰ	2	小島 康次	
	認知心理学特殊研究Ⅰ	2	浅村 亮彦	
	認知心理学特殊研究Ⅱ	2		
	認知心理学特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
認知心理学特殊研究Ⅳ	4	3年次開講		
論文指導科目	論文指導Ⅰ	2	各担当教員	開講せず
	論文指導Ⅱ	2		開講せず
	論文指導Ⅲ	2		開講せず

授業科目・単位数及び担当者一覧 [博士（後期）課程] 【2014（平成26）・2015（平成27）年度入学生】

授業科目		単位数	担当者	備考
組織情報関連科目	経営学原理特殊研究Ⅰ	2	澤野 雅彦	
	経営組織論特殊研究Ⅰ	2	大平 義隆	
	経営組織論特殊研究Ⅱ	2		
	経営組織論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	経営組織論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	経営戦略論特殊研究Ⅰ	2	今野 喜文	
	経営戦略論特殊研究Ⅱ	2		
	経営戦略論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	経営戦略論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	国際経営論特殊研究Ⅰ	2	菅原 秀幸	
	国際経営論特殊研究Ⅱ	2		
	国際経営論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	国際経営論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	企業行動論特殊研究Ⅰ	2	石井 耕	
	現代企業論特殊研究Ⅰ	2	石嶋 芳臣	
	現代企業論特殊研究Ⅱ	2		
	現代企業論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	現代企業論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	企業と社会特殊研究Ⅰ	2	春日 賢	
	企業と社会特殊研究Ⅱ	2		
	企業と社会特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	企業と社会特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅰ	2	伊藤 友章	
	マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅱ	2		
	マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	流通システム論特殊研究Ⅰ	2	佐藤 芳彰	
	財務会計論特殊研究Ⅰ	2	高木 裕之	
	財務会計論特殊研究Ⅱ	2		
	財務会計論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講
	財務会計論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講
	管理会計論特殊研究Ⅰ	2	内田 昌利	
情報コミュニケーション論特殊研究Ⅰ	2	福永 厚		
情報コミュニケーション論特殊研究Ⅱ	2			
情報コミュニケーション論特殊研究Ⅲ	4		2年次開講	
情報コミュニケーション論特殊研究Ⅳ	4		3年次開講	

(次項につづく)

(前項より)

	授業科目	単位数	担当者	備考
組織心理関連科目	組織心理学特殊研究 I	2	増地あゆみ	
	組織心理学特殊研究 II	2		
	組織心理学特殊研究 III	4		2 年次開講
	組織心理学特殊研究 IV	4		3 年次開講
	行動意思決定論特殊研究 I	2	鈴木 修司	
	行動意思決定論特殊研究 II	2		
	行動意思決定論特殊研究 III	4		2 年次開講
	行動意思決定論特殊研究 IV	4		3 年次開講
	学習心理学特殊研究 I	2	佐藤 淳	
	学習心理学特殊研究 II	2		
	学習心理学特殊研究 III	4		2 年次開講
	学習心理学特殊研究 IV	4		3 年次開講
	発達心理学特殊研究 I	2	小島 康次	
	認知心理学特殊研究 I	2	浅村 亮彦	
	認知心理学特殊研究 II	2		
	認知心理学特殊研究 III	4		2 年次開講
認知心理学特殊研究 IV	4	3 年次開講		
論文指導科目	論文指導 I	2	各担当教員	
	論文指導 II	2		
	論文指導 III	2		

授業科目・単位数及び担当者一覧 [博士（後期）課程] 【2012（平成24）・2013（平成25）年度入学生】

	授業科目	単位数	担当者	備考
組織経営関連科目	経営学原理特殊研究 I	2	澤野 雅彦	
	経営組織論特殊研究 I	2	大平 義隆	
	経営組織論特殊研究 II	2		
	経営組織論特殊研究 III	4		2 年次開講
	経営組織論特殊研究 IV	4		3 年次開講
	国際経営論特殊研究 I	2	菅原 秀幸	
	国際経営論特殊研究 II	2		
	国際経営論特殊研究 III	4		2 年次開講
	国際経営論特殊研究 IV	4		3 年次開講
	企業行動論特殊研究 I	2	石井 耕	
	現代企業論特殊研究 I	2	石嶋 芳臣	
	現代企業論特殊研究 II	2		
	現代企業論特殊研究 III	4		2 年次開講
	現代企業論特殊研究 IV	4		3 年次開講
	企業と社会特殊研究 I	2	春日 賢	
	企業と社会特殊研究 II	2		
	企業と社会特殊研究 III	4		2 年次開講
	企業と社会特殊研究 IV	4		3 年次開講
	マーケティング・マネジメント特殊研究 I	2	伊藤 友章	
	マーケティング・マネジメント特殊研究 II	2		
マーケティング・マネジメント特殊研究 III	4	2 年次開講		
マーケティング・マネジメント特殊研究 IV	4	3 年次開講		
流通システム論特殊研究 I	2	佐藤 芳彰		
組織情報関連科目	財務会計論特殊研究 I	2	高木 裕之	
	財務会計論特殊研究 II	2		
	財務会計論特殊研究 III	4		2 年次開講
	財務会計論特殊研究 IV	4		3 年次開講
	管理会計論特殊研究 I	2	内田 昌利	
	情報コミュニケーション論特殊研究 I	2	福永 厚	
	情報コミュニケーション論特殊研究 II	2		
	情報コミュニケーション論特殊研究 III	4		2 年次開講
情報コミュニケーション論特殊研究 IV	4	3 年次開講		
組織心理関連科目	学習心理学特殊研究 I	2	佐藤 淳	
	学習心理学特殊研究 II	2		
	学習心理学特殊研究 III	4		2 年次開講
	学習心理学特殊研究 IV	4		3 年次開講
	発達心理学特殊研究 I	2	小島 康次	
論文指導科目	論文指導 I	2	各担当教員	
	論文指導 II	2		
	論文指導 III	2		

経営学原理特殊研究 I

2 単位

澤野雅彦

【テーマ】

経営人類学の方法論的検討

【授業の到達目標】

われわれは、「集団や組織の経営的側面を人類学的展望と人類学的手法によって解明しようとする」経営人類学を提唱し、活動を行っている。経営人類学は、企業ばかりではなく、人類史上の生活経営 (life management) の比較研究を目的とする。経営人類学の文献を購読することによって、それが経営学全体の中で、どのような地位を占めうるか、また、経営学に対してどのような貢献をなしうるか、などについて理解できるようになる。

【準備学習の内容】

経営学・経済学・社会学・心理学などを、学んだことがあり、その研究方法を理解していることが望ましい。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【テキスト】

中牧弘允・日置弘一郎編著 1997『経営人類学ことはじめ』東方出版

日置弘一郎・中牧弘允編著 2007『会社文化のグローバル化——経営人類学的考察』東方出版などを考えている。

経営組織論特殊研究 I

2 単位

大平義隆

【テーマ】

組織の「社会文化的差違」の基礎研究

経営組織論では組織文化の研究が、主に企業の業績との関係で重要視され、盛んに行われている。この組織文化の研究では、同業他社を含め、個別企業間の差違を対象にするものである。従って、社会文化的な差違が存在した場合、これを無警戒に包含してしまうため、何らかの手だてが必要になる。

社会文化的な差違とはいかなるものか。例えば日本の経営論が叫ばれて以来、日米の管理スタイルの違いとして、我が国が全体尊重型であり、米国が個人尊重型である、といわれる。こうした差違は、企業行動の差違としてだけ観察した場合、行動の差違と企業制度の差違が結びつけられてきた。ところが、こうした差違が、企業制度以外の社会全般に見られる差違であることが分かってきた。

従来、「文化的な差違」と有耶無耶にされてきたこのことは、なんらかの継続的なメカニズムをもち、継続的な人間行動として発現している。本研究では、こうした問題全体の学習を受講者に求める。

【授業の到達目標】

受講者はテーマにした組織問題を、そのメカニズムを研究理解することを通して明確にし、さらに問題解決の工夫を提案することができるようになる。

【準備学習の内容】

経営組織論、経営管理論、経営行動論の基礎と応用を十分に学ぶこと。興味ある拡張する分野、例えば組織心理学、組織社会学、社会心理学の基礎をできれば学んでおいてほしい。加えて日米の集団、組織における相互作用と制度の違いを認識し、その差異を形成するメカニズムを理解しておくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

経営組織論特殊研究Ⅱ 2単位
経営組織論特殊研究Ⅲ 4単位
経営組織論特殊研究Ⅳ 4単位
論文指導Ⅰ/論文指導Ⅱ/論文指導Ⅲ 2単位/2単位/2単位
大平義隆

【テーマ】

組織の「社会的文化的差違」の発展研究

経営組織論では組織文化の研究が、主に企業の業績との関係で重要視され、盛んに行われている。この組織文化の研究では、同業他社を含め、個別企業間の差違を対象とするものである。従って、社会文化的な差違が存在した場合、これを無警戒に包含してしまうため、何らかの手だてが必要になる。

社会文化的な差違とはいかなるものか。例えば日本の経営論が叫ばれて以来、日米の管理スタイルの違いとして、我が国が全体尊重型であり、米国が個人尊重型である、といわれる。こうした差違は、企業行動の差違としてだけ観察した場合、行動の差違と企業制度の差違が結びつけられてきた。ところが、こうした差違が、企業制度以外の社会全般に見られる差違であることが分かってきた。

従来、「文化的な差違」と有耶無耶にされてきたこのことは、なんらかの継続的なメカニズムをもち、継続的な人間行動として発現している。本研究では、継続的なメカニズムのパターン、人間の意思決定のスタイル・パターンの研究から、現実の文化的な比較研究の再考を受講者に求める。

【授業の到達目標】

受講者はテーマにした組織問題を、そのメカニズムを研究理解することを通して明確にし、さらに問題解決の工夫を提案することができるようになる。

【準備学習の内容】

経営組織論、経営管理論、経営行動論の基礎と応用を十分に学ぶこと。興味ある拡張する分野、例えば組織心理学、組織社会学、社会心理学の基礎をできれば学んでおいてほしい。加えて日米の集団、組織における相互作用と制度の違いを認識し、その差異を形成するメカニズムを理解しておくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

経営戦略論特殊研究Ⅰ 2単位

今野喜文

【テーマ】

ダイナミックな競争戦略に関する研究

【授業の到達目標】

博士論文を作成するための基本を修得すること。

【授業概要】

競争戦略研究は、1980年代から1990年代初頭にかけて台頭したポジショニング・アプローチ、資源ベース・アプローチ、能力ベース・アプローチといった3つの戦略アプローチから、1990年代以降に台頭した競争のダイナミクスにフォーカスするゲーム・アプローチ、ダイナミック・ケイパビリティ・アプローチといった戦略アプローチへと発展してきた。たとえば、ダイナミック・ケイパビリティ・アプローチが扱う問題は、イノベーション、アントレプレナーシップ、進化、知識、学習、提携、買収、企業成長、企業境界、共進化、エコシステム等、多岐にわたっている。これらは今日の競争戦略研究において極めて重要な問題である。この点では、これまでの競争戦略研究を振り返ることは、より深く豊かな研究を進める上で必要不可欠な作業であるといえる。

本研究では、こうした一連の競争戦略研究をもとに、より発展的な研究テーマを模索し、博士論文のテーマ選定および準備を進めることが目的である。

【授業計画】

1. 経営戦略に関わる基本的な論文・文献の研究
2. 博士論文のテーマ設定
3. 博士論文の作成準備

【準備学習の内容】

研究テーマに合致する文献・論文をできる限り読み込んでおくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

論文内容と授業中の発言などにより評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

講義で適宜紹介する。

経営戦略論特殊研究 II 2 単位
経営戦略論特殊研究 III 4 単位
経営戦略論特殊研究 IV 4 単位
論文指導 I / 論文指導 II / 論文指導 III 2 単位 / 2 単位 / 2 単位

今野喜文

【テーマ】

ダイナミックな競争戦略に関する研究

【授業の到達目標】

博士論文の作成と報告

【授業概要】

本研究の目的は博士論文の作成である。この目的を達成するために、本研究では博士論文の研究テーマの選定、研究テーマに沿った先行研究の検討、研究仮説の設定と検証等、博士論文を作成する上で必要となるプロセスを確実に進める。

研究テーマについては、イノベーション、アントレプレナーシップ、ベンチャー・中小企業、学習、アライアンス、M&A、ビジネス・エコシステム等のさまざまなテーマにも対応する。もちろん、研究テーマは上記に限定されるものではない。基本的には履修者とよく話し合いながら研究テーマを選定し、優れた博士論文の作成に向けて指導したい。

【授業計画】

1. 博士論文のテーマ設定
2. 博士論文のテーマに関連する論文・文献の研究
3. 博士論文の作成と報告

【準備学習の内容】

自分の研究テーマに合致する文献・論文をできる限り読み込んでおくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

論文内容と授業中の発言などにより評価する。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

講義で適宜紹介する。

国際経営論特殊研究 I 2 単位

菅原秀幸

【テーマ】

企業活動のグローバル化にともなう諸課題の理論的・実証的研究

企業が国境を超えてグローバル展開を進めるにつれて、これまでとは異なる数々の新しい課題に直面しています。本講義の目的は、これらの中から主要ないくつかのトピックスを取り上げ、それらについて、歴史的、理論的、実証的視点から分析することです。

まず文献研究を中心として、ダイナミックに展開される今日のグローバル・ビジネスの全体を俯瞰します。その上で、受講生の関心領域に焦点を絞って、論文執筆のための理論的・実証的分析枠組みを検討します。

それに基づいて、working paper を執筆し、受講生自身の研究用ウェブサイトを立ち上げて、諸外国の研究者や分析対象企業と、インターネットを活用してコミュニケーションをとって研究を進めていきます。その過程で論文執筆に向けて、分析枠組みの精緻化を図っていきます。

予定している主要トピックスは、以下の7つです。
(1)グローバル企業のCSR、(2)グローバル企業によるBOPビジネス、(3)グローバル企業の世界戦略、(4)グローバル企業におけるダイバーシティ・マネジメント、(5)グローバル企業のマーケティング戦略、(6)新興国におけるグローバル・ビジネス、(7)非製造業企業のグローバル戦略

【授業の到達目標】

取り上げた研究論文（英語）の内容の完全理解と、そこからの発展的思考。

【準備学習の内容】

授業でとりあげるテーマに関して、事前に指示した研究論文（英語）を読んでから出席。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【テキスト】

開講時に受講生と相談の上、決めます。基本的にはオンライン・データベースから入手する学術論文を使用します。

国際経営論特殊研究Ⅱ 2単位
国際経営論特殊研究Ⅲ 4単位
国際経営論特殊研究Ⅳ 4単位
論文指導Ⅰ/論文指導Ⅱ/論文指導Ⅲ 2単位/2単位/2単位

菅原秀幸

【テーマ】

21世紀型グローバル経営の探求

本演習の目的は、「21世紀型グローバル経営」について多方面から分析し、博士論文執筆をめざす博士後期課程の大学院生に対して、論文指導を行うことです。

21世紀のグローバル企業には、経済的価値に加えて、社会的価値ならびに環境的価値の創造が求められています。21世紀型ビジネスの議論は緒に就いたばかりですが、それだけにきわめて挑戦的な課題にあふれています。

ダイナミックに展開されるグローバル・ビジネスの最前線を肌で感じながら、実践的視点からの分析を通して博士論文の完成を目指します。

【授業の到達目標】

博士論文の完成

【準備学習の内容】

事前に指示した研究論文を読んでから出席。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

企業行動論特殊研究Ⅰ 2単位

石井 耕

【テーマ】

企業行動と経営者に関する事例と実証的研究

【授業の到達目標】

博士論文の作成をめざす博士（後期）課程院生に対して、論文指導を行う。とくに企業行動および経営者に関する体系的理解をめざす。

【授業概要】

本研究・論文指導では、日本企業の企業行動とその実施主体である経営者に関する事例および実証的研究を行う。

【授業計画】

企業行動および経営者に関する事例研究

- 1 経営戦略の理論的・実証的研究
- 2 日本企業の企業行動の諸特徴
- 3 経営者の理論的・実証的研究
- 4 経営者の選任に関する研究

*具体的には、入学生の研究計画に対して、内容を検討するので、毎年異なる。

【準備学習の内容】

文献を検索し、講読すべき論文・書籍を読んでくる。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【テキスト】

石井 耕『企業行動論 第3版』八千代出版、2013年、2800円

【参考文献】

開講後、論文および書籍を指定する。

【成績評価】

報告と出席による。

【その他】

特になし。

現代企業論特殊研究 I

2 単位

石 嶋 芳 臣

【テーマ】

社会科学としての企業論と経営学方法論

【授業の到達目標】

- ①社会科学方法論に関する理解を深める。
- ②現代企業諸理論に関する洞察を深める。

【授業概要】

用語の意味の矮小化、すり替えに気付かず、本来の概念を歪曲して理解していることがある。企業経営に関していえば、オイルショック以降に行われた人員整理を「合理化」と言い、バブル経済の崩壊以降は「リストラ」と言い換えた。人員整理をリストラと言い換えるとき、因果関係の倒錯が行われている。さらに、粉飾決算や偽装表示、リコール隠しなど企業による違法行為である組織「犯罪」を「不祥事」と呼ぶことがある。企業不祥事 (Corporate Scandal) とは、特定の個人が業務や職務と無関係に起こした不正や事故について、その人が所属する企業組織から見てあってはならない出来事を意味している。企業犯罪を不祥事と言い換えるとき、行為の主体は消失し違法行為の結果に対する責任が自覚されることも、経験が内面化されることもない。経験の内面化がない限り、行為に対する責任の内的負担も消失する。主体性の欠如した無自覚な行為がもたらす結果に対する責任の所在は存在しえない。

日本の経営学は、こうした問題に対し如何に立ち向かってきたのだろうか。学としての経営学の責任が問われるところである。

本講では、博士論文の作成に向けて受講者諸氏の方法論的立場を明確にし、一定の理論的立場から個別具体的課題を追究するための準備として、経営学的研究と関連する方法論争、学派、各種アプローチなどを追究する。

【授業計画】

1. 科学の考え方、科学哲学、社会科学方法論の検討
2. 受講者諸氏の研究テーマに即した先行研究の分析
3. 博士論文作成のためのテクニカルな指導・サポート

【準備学習の内容】

- ①受講者諸氏の研究テーマに即した先行研究の分析。

②受講者諸氏の研究テーマに関連した学問領域の研究。

③配付資料や指定文献の分析と研究。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

必要に応じて、その都度、適宜、指摘・紹介する。

【成績評価】

講義への参加度（発言、発表等）による平常点で評価する。

現代企業論特殊研究Ⅱ 2単位
現代企業論特殊研究Ⅲ 4単位
現代企業論特殊研究Ⅳ 4単位
論文指導Ⅰ/論文指導Ⅱ/論文指導Ⅲ 2単位/2単位/2単位

石 嶋 芳 臣

【テーマ】

現代企業経営論の課題と企業のダイナミズム

【授業の到達目標】

- ①ケース・スタディや統計分析を科学的に利用できる。
- ②知の探索と知の深化のバランスを取りつつ経営学の発展に寄与する。

【授業概要】

経営学はその成立以来、現実の経営と応答しつつ展開してきた。企業が直面している諸課題を明らかにし、その対応のあり方や解決の糸口を探ることは経営学に課された重要な役割の1つである。ところが経営学という名の下で、社会的風潮に流されるがまま様々な学説が主張され、もてはやされては廃れていくことがあるのもまた事実である。それはひとえに、日々流転する現実への対処に翻弄され、目新しさを無批判に取り入れることで具体的・実践的課題を対処療法的にクリアしようとしてきたからに他ならない。

本稿では、現代企業が直面する様々な時事的問題に潜む本質的課題を各種資料・データの分析、諸学説の批判的検討を通じて理論的・実証的に追究する。

【授業計画】

1. 調査・分析のための統計学的手法の検討
2. 受講者諸氏の研究テーマに即した先行研究の分析
3. 博士論文作成のためのテクニカルな指導・サポート

【準備学習の内容】

- ①受講者諸氏の研究テーマに即した先行研究の分析。
- ②受講者諸氏の研究テーマに関連した学問領域の探究。
- ③配付資料の分析や指定文献の研究。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【テキスト】

特になし。

【参考文献】

必要に応じて、その都度、適宜、指摘・紹介する。

【成績評価】

講義への参加度（発言、発表等）による平常点で評価する。

【その他】

基本的には受講者諸氏の博士論文作成に向けた指導となる。いかなる研究テーマを設定するかは個人の生きる意欲と結びついており、本講のテーマに必ずしも拘束されるものではない。以上の点を踏まえ、優れた博士論文作成の一助となるよう、テクニカルな指導・サポートのほか、研究テーマに即した議論・討論を行う。

企業と社会特殊研究 I 2 単位

春 日 賢

【テーマ】

「企業と社会」方法論の考察

経営学において一般に「企業と社会」のはじまりとして認知されているのは、古くはシェルドン『経営のフィロソフィー』（1924）であり、その後本格的な研究としてポーエン『ビジネスマンの社会的責任』（1953）、マグガイア『企業と社会』（1963）などがつづいた。また、ハーバードにおけるコールらの企業者史研究は1940年代後半から10年ほど行われたが、そこでの主題も「企業と社会」にあったといえる。経営学上の大きなテーマとして「企業と社会」研究が本格化しはじめるのは、1960年代以降のことである。また、これらに並行する流れとして、制度論的研究がある。企業を社会制度とみなす視点は、ドラッカーにおいてマネジメント概念のもとに集約されることとなっている。

「企業と社会」研究はそこに含まれる内容を吟味してみれば、きわめて多様かつ広範な領域にわたっている。いうまでもなくそれは企業環境の変化が漸次その範囲・程度にわたって拡大深化していることと相まっているが、ひるがえって現代社会における企業存在の重要性がいや増すとともに、その根本的意義への問いかけが絶えず繰り返されていることの表れでもある。本講義では、いくつかのキー・コンセプトを読み解きながら、社会の中の企業およびマネジメントを検討していく。既存の思考に対する絶えざる問いかけを、受講者に求める。

【授業の到達目標】

博士論文作成に向けた構想と具体的な計画の構築。

【準備学習の内容】

発表担当のいかんにかかわらず、輪読する部分についての質問および自分なりのコメントをしっかりと用意しておくこと。その他授業前に疑問に思った点については、できるだけ自分で調べて授業にのぞむこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

企業と社会特殊研究 II 2 単位
企業と社会特殊研究 III 4 単位
企業と社会特殊研究 IV 4 単位
論文指導 I / 論文指導 II / 論文指導 III 2 単位 / 2 単位 / 2 単位

春 日 賢

【テーマ】

社会制度としてのマネジメント研究

ドラッカーにおいてマネジメントとは、「人間主義」と「機能主義」の統合体である。「人間主義」とは「何をめざすのか」という目的・理念すなわち人間的価値にかかわるものであり、「機能主義」とはかかる価値の実現に向けて「いかに行動するのか」という手段・実践すなわち技術にかかわるものである。手段なき目的が夢想でしかないように、目的なき手段も形骸でしかない。実践なき理念が画餅でしかないように、理念なき実践も虚無でしかない。「人間主義」と「機能主義」、実に各々が両輪として互いに運動してはじめて、マネジメントはマネジメントたりうる。いずれかが欠落しても、もう一方だけで成り立つというものではないのである。

「人間主義」と「機能主義」は、人間性・社会性と効率性・競争性の問題と言い換えることもできる。しかし、マネジメントは「実用の学」を掲げるがゆえに、ややもすれば冷徹な効率性・競争性一方のみに陥ってしまう危険性を常にはらんでいる。私的利益の追求だけを目的とするもの、金もうけの手段、あるいは目的のためには手段を選ばないものといった、資本価値増殖の飽くなき追求体という側面である。管理論としての経営学発展の歴史は、「実用の学」が効率性・競争性を主要課題としてきたことを物語る。そして、それは冷酷かつ非人間的、非人道的なネガティブなものにまで行き着く。昨今の企業不祥事の頻発が、マネジメントが人間性・社会性を副次的にあつてきた結果とすれば、今まさにマネジメントは自らの存在意義をも大きく問われていることになる。

以上のような視点に立ちながら、本演習では主として社会における企業のあり方、社会的存在としての企業およびマネジメントに関するテーマについて、博士論文の作成をめざす博士（後期）課程の学生に対して、論文指導を行う。既存の思考に対する絶えざる問いかけを、受講者に求める。

【授業の到達目標】

博士論文の作成。

【準備学習の内容】

発表担当のいかんにかかわらず、輪読する部分についての質問および自分なりのコメントをしっかりと用意しておくこと。その他授業前に疑問に思った点については、できるだけ自分で調べて授業にのぞむこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

マーケティング・マネジメント特殊研究 I 2単位

伊藤友章

【テーマ】

マーケティング戦略の理論的、実証的研究

【授業の到達目標】

- ・専門分野に関する深い知識を獲得し、それを論文執筆や修了後の職務において、十分に活用できるようになること。
- ・研究方法論や学説など、専門領域を深めるために必要な知識を、自分のものにする。
- ・博士論文執筆予定者は、自身の論文の質を少しでも高めるために、本講義を最大限に生かすこと。

【授業概要】

マーケティング戦略研究の中でも特に競争優位確保のための市場競争戦略の研究が中心になる。競争優位確保のロジックに関する議論は競争戦略論においては実に多彩に展開されており、それらはマーケティング戦略の競争対応（競争優位確保）を把握する上でもその理論的な基礎をもたらしてくれる。

競争戦略論における競争優位確保のアプローチは M. E. Porter を中心とした SCP パラダイムをベースにしたポジショニング・ベースの視点とシカゴ学派の影響を受けた資源ベース視角の2つのアプローチに大きく分けられている。前者は市場での自社のポジションの確保という組織の外部に競争優位性（超過利潤の確保）の源泉があると捉えるのに対して、後者は組織内部の経営資源や能力に競争優位の源泉があると捉えている。さらに、資源ベース視角に資源・能力の生成・変化のプロセスといったダイナミックな視点を加えたダイナミック・ケイパビリティ・アプローチ、ポジショニング視角にダイナミックな視点や協力的な行為の可能性を取り入れたゲーム論アプローチなども盛んである。本講義ではこのような競争優位確保のための競争戦略に関するこれまでの様々な学説を整理し、理解を深めていくことを主な目的にする。

また博士論文作成に向けての様々なサポート、指導も、受講生各自のニーズに応じて行っていく予定である。各自の現在の研究についての中間報告なども数回にわたって行っていきたい。

【授業計画】

講義の概要は以下の通りである。

1. 戦略論の系譜の全体的理解

2. ポジショニング・ベースの戦略論
3. 資源ベースの戦略論
4. ダイナミック・ケイパビリティ論および知識創造理論
5. ゲーム論的戦略論
6. 新制度派アプローチと戦略論
7. 間接的経営戦略
8. マーケティング戦略への示唆

【準備学習の内容】

- ・講義で取り上げる箇所について事前に関連図書を読んだり、具体的事例を見つけ出したりしておくこと。
- ・授業後は、授業内容について振り返るための講義ノートを作成しておく。ノートの体裁等については最初の講義で指定する。
- ・博士論文執筆予定者は、論文の途中経過、論文に関して直面している問題点や疑問点を丁寧にまとめたうえで出席する。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

- ・授業内での課題
- ・出席
- ・各自の研究テーマの進捗状況

【テキスト】

以下のようなものを考えている。

沼上幹「経営戦略の思考法」日本経済新聞社

沼上幹「市場戦略の読み解き方」東洋経済新報社

マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅱ 2単位
マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅲ 4単位
マーケティング・マネジメント特殊研究Ⅳ 4単位
論文指導Ⅰ/論文指導Ⅱ/論文指導Ⅲ 2単位/2単位/2単位

伊藤友章

【テーマ】

マーケティング戦略の理論的、実証的研究

【授業の到達目標】

- ・専門分野に関する深い知識を獲得し、それを論文執筆や修了後の職務において、十分に活用できるようになること。
- ・研究方法論や学説など、専門領域を深めるために必要な知識を、自分のものにする。
- ・博士論文執筆予定者は、自身の論文の質を少しでも高めるために、本講義を最大限に生かすこと。

【授業概要】

競争優位の確保は、その源泉を市場でのポジションで捉えるにせよ、組織内部の資源や能力で捉えるにせよ、それらがもたらす企業の提供物に対して顧客（消費者）がどのように評価し、競合の中からどのような選択（意思決定）を行うのかにかかっていることはいうまでもない。消費者の評価・選好・選択に関わる局面については、マーケティング論、消費者行動論で多数の蓄積があるはずである。

戦略論とマーケティング（消費者行動論を含む）との間に明確な境界線はほとんどなくなっていることは、戦略的マーケティングという概念が出現した約30年前より国内外のマーケティング研究の世界において指摘されていることである。にも関わらず、今日に至るまで競争戦略論、マーケティング戦略論、消費者行動論のそれぞれの知見を結びつけるような研究は十分になされているとは言い難い状況である。本講義では、以下の書籍を通じて、マーケティングと消費者行動のこれまでの議論を振り返り、市場あるいは顧客対応を中心とした競争優位確保のロジックを検討し、競争戦略およびマーケティング戦略の新たな枠組みを探ることを目的とする

また特殊研究1と同様に、博士論文作成に向けての様々なサポート、指導も、受講生各自のニーズに応じて行っていく予定である。各自の現在の研究についての中間報告なども数回にわたって行っていきたい。

【授業計画】

講義の概要は以下の通りである。

1. マーケティング戦略の概要
2. 消費者行動とマーケティング戦略

3. 消費者購買意思決定の理論（情報処理パラダイムを含む）
4. 消費者間相互作用の理論（口コミ他）
5. 市場志向の戦略論
6. 市場ドリブン戦略と市場ドライビング戦略
7. 顧客関係性管理
8. 消費者起点のイノベーション
9. まとめ

【準備学習の内容】

- ・講義で取り上げる箇所について事前に関連図書を読んだり、具体的事例を見つけ出したりしておくこと。
- ・授業後は、授業内容について振り返るための講義ノートを作成しておく。ノートの体裁等については最初の講義で指定する。
- ・博士論文執筆予定者は、論文の途中経過、論文に関して直面している問題点や疑問点を丁寧にまとめたうえで出席する。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

- ・授業内での課題
- ・出席
- ・各自の研究テーマの進捗状況

【テキスト】

以下のようなものを考えている。

G. S. Day & C. Mooreman., *Strategy from the Outside In.*, McGrawhill

清水聡「日本発のマーケティング」千倉書房

流通システム論特殊研究 I 2 単位

佐藤 芳 彰

【テーマ】

流通システムと流通産業の実証的・理論的研究

流通は取引の連鎖であり、流通システム研究の焦点は取引に当てられ、取引の経路であるマーケティングチャンネルのあり方や、取引条件の制度化や慣行などが研究対象となる。チャンネルリーダーとなった企業による、他のチャンネルメンバーの組織化あるいは流通機能の統合は、垂直的組織化と呼ばれる。市場での取引から準組織での管理された取引の方向へなぜ向かうかは、経済学的には取引コストの理論や内部組織の経済学と呼ばれる研究と関連するものである。経営学的には、メーカーによるチャンネルコントロールが問題になり、パワー・コンフリクト論を中心にした組織間関係の枠組みの中で議論がなされてきた。わが国では流通系列化と呼ばれ、マーケティングでは垂直的マーケティングシステム（VMS）として議論されてきた。

小売業者は、大規模化に伴うバイイングパワーを背景に、メーカーとの垂直的な競合・対立する段階に入り、更に、両者共に利益となるシステムを構築するために、両者が協調・協働するパートナーシップあるいは戦略提携の段階に入る。理論的には、パワー・コンフリクト論から製販提携による関係性マーケティングの議論へと移行である。この具体的現象は、高度に統合されたロジスティクスと考えられるサプライチェーン・マネジメント（SCM）に見られる。アパレルでのQRや食品や日用雑貨業界 ECR なども SCM として統合されてきた。これは、顧客を基点として過不足のない商品の生産・流通を実現するためのシステムであり、相互の信頼に基づく新しい取引関係を内包している。

このように流通システムは、メーカーや流通企業の経営活動の結果、形成され変化してきた。小売業は、総合スーパーを中心に大きく成長し、コンビニエンスストアに代表されるような新業態が多数出現した。流通システムで、大規模小売業が主導する面も多く見られるようになり、小売業の経営に関する実証的・理論的研究が、これまで以上に重要となっている。電子的受発注システム、POS システムなどの流通情報システムが発展し、そのデータ活用は、小売企業経営にとって重要となっている。また、インターネットコマースの発展が急速に進んでおり、流通システムにも影響を与えている。講義では、以下の内容にしたがって、流通システムと流通産業に関して講義する。

1. 取引コストの理論と取引の内部組織化
2. メーカー主導の VMS と流通系列化
3. 小売業主導のチャンネルと製販戦略提携
4. 流通産業の発展と小売業・卸売業の経営

【授業の到達目標】

メーカーのチャンネル管理や商業経営など、流通システムに関連した理論や事例を理解し、自身の研究テーマに基づく理論構築ができるようにする。

【準備学習の内容】

メーカーのチャンネル管理や商業経営など、流通システムに関しての理論や事例について資料に基づき事前に予習する。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

非営利事業論特殊研究 I 2 単位

菅原浩信

【テーマ】

民間非営利組織や公企業のマネジメントに関する理論的・実践的研究

【授業の到達目標】

民間非営利組織や公企業のマネジメントに関する博士論文を作成するための準備を完了させる。

【授業概要】

本研究では、民間非営利組織や公企業のマネジメントについての問題意識に基づき、さらに深化・発展させた博士論文の研究テーマを設定する。

【授業計画】

1. 民間非営利組織や公企業のマネジメントに関する論文等の研究
2. 博士論文の研究テーマの設定
3. 設定された研究テーマに関連する先行研究の検索

【準備学習の内容】

民間非営利組織や公企業のマネジメントに関する論文等（主として事前に指定する）をあらかじめ読んでおく。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

報告内容および議論内容により評価する。

【テキスト】

履修者の問題意識・関心等をふまえて決定する。

【参考文献】

必要に応じて適宜紹介する。

【その他】

特になし。

非営利事業論特殊研究 II 2 単位
非営利事業論特殊研究 III 4 単位
非営利事業論特殊研究 IV 4 単位
論文指導 I / 論文指導 II / 論文指導 III 2 単位 / 2 単位 / 2 単位

菅原浩信

【テーマ】

民間非営利組織や公企業のマネジメントに関する理論的・実践的研究

【授業の到達目標】

博士論文を完成させる。

【授業概要】

本研究では、設定された博士論文の研究テーマに沿った理論的・実践的研究をふまえ、博士論文の作成に至るまでの指導を行う。

【授業計画】

1. 研究テーマに関連する先行研究のサーベイ、研究仮説の構築、研究方法の検討、研究計画の作成
2. 研究に関する進捗状況の報告（学会等での報告準備および報告を含む）
3. 博士論文提出に向けた準備

【準備学習の内容】

民間非営利組織や公企業のマネジメントに関する先行研究をあらかじめ検索し、読んでおく。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

報告内容、議論内容および研究成果により評価する。

【テキスト】

特に指定しない。

【参考文献】

必要に応じて適宜紹介する。

【その他】

特になし。

財務会計論特殊研究 I

2 単位

高 木 裕 之

【テーマ】

企業会計制度の機能に関する研究

本講義では、経営管理の観点から、資本の運用・調達にたいして企業会計制度がどのように機能するのかを、日本の企業会計制度の根幹を築いてきたドイツ企業会計制度を研究対象として論究することを目的としている。

我が国同様、基準性の原則（確定決算主義）を通して商法会計と税務会計が一体の関係をなすドイツ企業会計制度はその性格上法会計制度として特徴づけることができる。企業の資本の運用・調達は国際化する一方で、従来、大企業は国内基準のほかに資本調達する相手国の国内基準を遵守しなければならないという現実に悩まされていた。しかし、資本調達容易化法により、大企業は、国際会計基準または国際的に認められた会計基準に準拠して連結会計を行うことができるようになった。同法は国際展開する大企業の要請に基づいて制定されたのであるが、成文化された内容は法律の解釈を通じて実務、すなわち資本の運用・調達に作用することは従来と同様である。同法の適用対象は連結会計であるが、連結会計が個別会計を前提としていることを鑑みれば、企業会計に関する法律、とりわけ商法典の内容を詳細に吟味し、その成立過程を検討することが大企業の資本の運用・調達の現実的理解にとって必要不可欠であり、税務会計にも影響を及ぼすことを考慮すれば一層重要である。法律の立法過程および解釈は実務界からの影響が強く反映されているのであり、企業の経営管理との関連が常に意識されねばならない。

このように、経営管理の観点を常に念頭に置きながら、資本の運用・調達を企業会計制度との関連で捉えることが必要であり、正規の簿記の諸原則、基準性原則、逆基準性原則を企業会計制度の橋脚概念として捉え、それを通してどのように資本の運用・管理が有効に行われるのかを論究する。

講義の大意は以下のとおりである。

- I 企業会計制度における橋脚概念
- II 正規の簿記の諸原則の構造
- III 基準性原則の制度的役割
- IV 企業会計制度の橋脚概念と経営管理
- V ドイツ企業会計制度におけるアングロサクソン系概念の包摂
- VI 資本調達容易化法と大企業の資本調達

VII 資本市場の国際化と経営管理

【授業の到達目標】

- ・ジャーマン・フランコ型の会計基準の特徴を理解している。
- ・アングロサクソン型の会計基準の特徴を理解している。

【準備学習の内容】

- ・各回のテーマについて、国内外の会計基準を調べる。
- ・会計基準の背景となる社会・経済状況を調べる。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

財務会計論特殊研究 II 2単位
財務会計論特殊研究 III 4単位
財務会計論特殊研究 IV 4単位
論文指導 I / 論文指導 II / 論文指導 III 2単位 / 2単位 / 2単位

高木裕之

【テーマ】

ドイツ会計法の歴史的展開と国際資本市場への適応

【授業の到達目標】

- ・研究テーマに対する実務上あるいは理論上の課題及び問題点を理解し、資料を正確に分析し、課題・問題点に対し実証的・論理的に結論を導き、論文を完成している。

【授業概要】

ドイツ企業会計制度の基本的基盤を確認し、大陸法系の企業会計制度を基盤に持つドイツ企業会計制度に、アングロサクソン系の企業会計制度がどのように包摂されていったのかについて、研究する。

【授業計画】

特殊研究 II～IV は、指導担当する各院生のテーマに即して指導計画を立てる。一般には、次のような指導となる。

1. 修士論文を含め過去に書き上げた研究論文を見直した後、研究テーマがどのような位置づけであるのかを指導する。
2. どのような問題意識をもち、どのように解決したのかについて議論・指導する。
3. 論文の仮テーマに関する指導。
4. 研究テーマに対する資料収集の指導。
5. 論文の構成に関する指導。
6. 内容の首尾一貫性と論理性に関する指導。
7. 論文の形式に関する指導。
8. その他

【準備学習の内容】

- ・企業会計制度の背景について、その基盤となる経済・社会を歴史的にとらえておく。
- ・研究テーマについて実務上の実態を収集する。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

平常点

【テキスト】

なし

【参考文献】

随時紹介する。

【その他】

なし

管理会計論特殊研究 I 2単位

内田昌利

【テーマ】

管理会計の“チェンジ”をどう理解するか
—管理会計研究のパースペクティブと歴史理解—

【授業の到達目標】

近年の管理会計の“チェンジ”を、会計機能の内生的展開とみるか外生的展開とみるか、さまざまな歴史理解の視座からその意義を比較考察する。

【授業概要】

アメリカ管理会計の歴史の丹念な読み解きから、伝統的管理会計が19世紀から20世紀初めにかけて管理者の意思決定と統制を支援・促進する会計システムとして発展してきたが、財務会計偏重の時代の流れのなかでその後歪められ誤用され、今や適合性を喪失しているとのジョンソン＝キャプラン（1987）の指摘のインパクトは大きく、理論と実務のギャップを埋めて、適合性を回復するために提起された新たな管理会計手法が急速に産業界に普及しつつある。

管理会計は単なる管理技術ではなく、現代の社会的・組織的の制度として組み込まれて機能するものである。したがって、生産テクノロジーの変化に対応する技術的適合性の考察にとどまらず、社会・組織における管理会計の果たす役割—すなわち、どのような社会的・組織的の圧力が管理会計技術の発展・利用を促し正当化するか、また反対に、管理会計が組織や社会にいかなる影響を及ぼすか—をどのように理解するかは、管理会計研究にとって一つの大きなテーマである。

本講義では、管理会計の社会的・組織的役割をめぐり歴史理解を、機能主義的視座に立つジョンソン＝キャプラン説とそれに代わる解釈学的視座と批判的視座に立つ説の2つを対照させて考察する。

こうした考察を通して、現代の複雑な組織において管理会計システムが組織コントロールの遂行の手段として多面的に果している役割ないし目的を代替的諸パースペクティブも動員して理解することで、より学際的かつ総合的に研究する必要性があらためて認識されるであろう。博士（後期）課程でのより高度な研究への一層の関心喚起が期待される。

【授業計画】

- I 伝統的会計史観とパースペクティブ
- II ジョンソン&キャプランの管理会計史観とパースペクティブ
- III ①ホップウッド、②ロフト、③コバレスキの管理会計史観と代替的パースペクティブ
- IV Better Budgeting か Beyond Budgeting か？

V 管理会計の多面的機能の理解にむけて

【準備学習の内容】

社会科学における研究方法の一環として、広く歴史観(視座)を理解しておくことは会計研究においても重要である。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【参考文献】

適宜紹介する

【成績評価】

平常点および研究発表により総合的に評価する

経営情報論特殊研究 I

2 単位

天 笠 道 裕

【テーマ】

不確実性に対処した科学的方法論に関する研究の遂行

【授業の到達目標】

- (1)不確実性に対処したシステムズアプローチを理解する。
- (2)これまでに発表されている科学的方法論について考究し、網羅的に理解する。

【授業概要】

経済・経営や社会問題などの大規模・複雑で、かつ、不確実性を伴う問題の本質を把握し、解決するための主要な方法であるシステムズアプローチを中心として、経営管理機能展開のための科学的方法論について、不確実性や情報との関連性を考慮しながら考究する。ここでは、予測法、多属性評価法、システムモデリングとその応用、区間データをもつ重回帰分析、人事評価、企業評価、多属性評価、売価設定などが主要テーマとなる。

【授業計画】

- I. Prediction method
- II. Multiple Attribute Decision Making
- III. Structural Modeling Method
- IV. Multiple Regression Analysis with Interval Data
- V. Decision Support System
- VI. Decision Support System of Human Resource Management
- VII. Decision Support System of Value Improvement for Products
- VIII. Corporate Capability Performance Evaluation
- IX. Decision Support System for Corporate Capability

【準備学習の内容】

先行研究となる文献・論文の収集を網羅的に行っておくこと。さらに、これらに関して、できる限り読み込んでおくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

研究の進捗状況に基づいて総合的に評価する。

【テキスト】

研究テーマに関連する文献を適宜配布する。

【参考文献】

その都度示唆する。

【その他】

特になし

経営情報論特殊研究Ⅱ 2単位
 経営情報論特殊研究Ⅲ 4単位
 経営情報論特殊研究Ⅳ 4単位
 論文指導Ⅰ/論文指導Ⅱ/論文指導Ⅲ 2単位/2単位/2単位

天 笠 道 裕

【テーマ】

不確実性に対処した科学的方法論に関する研究の遂行

【授業の到達目標】

- (1)これまでに発表されている、不確実性に対処した科学的方法論を理解し、新しいオリジナリティのある研究論文を作成する。
- (2)博士論文を作成する。
- (3)学生自身が公刊した学術論文に基づく博士論文の書き方や、学会や国際会議等でのプレゼンテーションの方法を修得する。

【授業概要】

研究テーマを決定し、「経営情報論特殊講義」、「経営情報論特殊講義演習Ⅰ・Ⅱ」等において考究した科学的方法論の限界と新しい科学的方法論の必要性について考察する。さらに、新しい方法論に関する研究を押し進め、研究論文として纏め上げるための研究指導を行う。

このとき、論文審査のための基準等を参考にしながら、論文作成のための手続きや論文の書き方に関する研究指導を行う。さらに、学生自身がそれまでに公刊した学術論文を取り入れた博士論文の書き方や、学会や国際会議等でのプレゼンテーションの方法についても指導する。

【授業計画】

- I. 学生自身が公刊した学術論文の購読と博士論文への展開可能性に関する検討
- II. 学生自身が公刊した学術論文を取り入れた博士論文の書き方
- III. 学会や国際会議等でのプレゼンテーションの方法の学習
- IV. 博士論文を展開するための基礎理論の整理
- V. 博士論文の本論の展開
- VI. 序論、基礎理論および本論の論理的流れの検討
- VII. 序論、基礎理論および本論の論理性およびオリジナリティの検討
- VIII. 本論文の検証性・実証性
- IX. 博士論文の体系的流れの確認
- X. 博士論文の審査基準に照らした検討・評価

【準備学習の内容】

先行研究となる文献・論文の収集を網羅的に行っておくこと。さらに、これらに関して、できる限り読み込んでおくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

研究の進捗状況に基づいて総合的に評価する。

【テキスト】

研究テーマに関連する文献を適宜配布する。

【参考文献】

その都度示唆する。

【その他】

特になし

情報コミュニケーション論特殊研究 I 2単位

福 永 厚

【テーマ】

組織における情報コミュニケーションとその分析方法

【授業の到達目標】

組織における情報コミュニケーションとその分析方法についての知見を得ること。

【授業概要】

情報コミュニケーションの研究は、企業や行政などの組織体において、情報活動、すなわち情報の収集 (input)、処理 (processing)、記憶 (storage)、検索 (access)、提供 (output) や組織構成員間のコミュニケーションをより効果的に管理・運営して、組織の各管理者やトップマネジメントの意思決定に貢献することを目的としている。その為には、組織において構成員間でどのようなコミュニケーションが行われ、どのような情報が流れているかを明らかにすることが重要である。構成員に対してアンケートやインタビューを行ってデータを収集し、構成員間のコミュニケーション関係をネットワークによって表現し、それに対してネットワーク分析を行い、実際の組織階層と比較することについて講義する。さらに、近年の情報通信技術の進展により、テレビ会議や電子会議などの様々なコミュニケーション・システムが企業に普及して来ている。それらを利用して、組織構成員間、管理者人間同士及び組織体における情報活動がどのように変わるかについて講義する。

【授業計画】

- I 情報コミュニケーションとは
- II 組織コミュニケーション
- III 組織コミュニケーションのネットワーク分析
- IV ネットワークと組織
- V 情報コミュニケーション・システムの種類と利用状況
- VI 情報コミュニケーション・システムと対面とのコミュニケーション比較分析
- VII 情報コミュニケーション・システムが組織に与える影響について
- VIII 情報コミュニケーションの応用

【準備学習の内容】

事前にテキストや資料を読み、質問や意見を整理しておく。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

平常点及び課題の履行状況により評価する。

【テキスト】

テキストは受講者と相談の上、決める。

情報コミュニケーション論特殊研究Ⅱ 2単位
情報コミュニケーション論特殊研究Ⅲ 4単位
情報コミュニケーション論特殊研究Ⅳ 4単位
論文指導Ⅰ/論文指導Ⅱ/論文指導Ⅲ 2単位/2単位/2単位

福 永 厚

【テーマ】

組織体における情報コミュニケーションの研究

【授業の到達目標】

組織体における情報コミュニケーションについての知見を得ることと研究能力の向上をはかる。

【授業概要】

本演習の目指すところは、組織における情報の流れや組織構成員間のコミュニケーション関係を明らかにし、そこに存在している問題点を見出して改善案を提案することである。特に、最近の目覚ましい情報通信技術の進歩によって、企業において様々なコミュニケーション・システムが利用できるようになってきており、組織に適合したコミュニケーション・システムの利用法や新しいシステムの提案を行う。

まず、実際の企業組織を例にとり、その組織における情報コミュニケーションを分析する。組織の構成員に対して誰とどの程度コミュニケーションを取っているか、どのような情報をやり取りしているのか、コミュニケーション・システムをどのように利用しているのかについてアンケート調査やインタビューを行い、構成員間の関係及び情報の流れ、コミュニケーション・システムの利用状況についてのデータを取得して、ネットワークの構造の分析を行う。各人のネットワーク上での役割と、実際の組織階層との比較を行い、組織コミュニケーションにおける問題点を明らかにする。

組織コミュニケーション上の問題点の改善、特にコミュニケーション・システムの導入による改善について考察する。改善案と従来のシステムとをコミュニケーションに関して比較する実験を行って定量的に評価し、組織における新しいコミュニケーション・システム構築や利用法の提案を行う。以上の一連の分析や考察、提案を学位論文として提出できるように論文指導を行う。

【授業計画】

- I 実際の企業組織におけるコミュニケーション状況、情報伝達、システムの利用状況についての実態調査
- II データ分析
- III ネットワーク分析

IV 情報コミュニケーション・ネットワークと組織階層との比較考察

V 組織コミュニケーション・システムの問題点と改善案

VI 新しいシステムの提案と定量的評価

【準備学習の内容】

事前にテキストや資料を読み、質問や意見を整理しておく。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

出席と課題の履行状況により評価する。

【テキスト】

受講者と相談の上、テキストを決める。

組織心理学特殊研究 I	2 単位
増地 あゆみ	
【テーマ】 組織と個人の相互作用に関する心理学的問題の検討	
【授業の到達目標】 本演習では、博士課程での研究遂行に必要な知識とスキルを習得しながら、研究テーマの設定、先行研究の文献研究、問題と目的の設定を経て、研究計画の作成を目指す。	
【授業概要】 組織における個々の人間行動は、組織の構造や制度、組織文化や組織の目標といった組織のマクロな要因から影響を受ける。また同時に、組織のなかで、個人と個人の間で発生するコミュニケーションや対人葛藤、上司と部下の人間関係など、個人と個人の関わりが組織全体を創り上げている側面もある。このような組織と個人の相互作用のなかで生じる様々な問題のなかから研究テーマを絞り、先行研究についての理解を深め、受講生の研究テーマ設定と研究計画の作成へつなげる。	
【授業計画】 1. 先行研究の探索と概観 2. 問題と目的の整理 3. 研究計画の策定と実験・調査の準備	
【準備学習の内容】 文献の検索方法や文献の読み方、心理学および組織心理学領域の基礎知識を確認しておく。	
【課題に対するフィードバック】 報告・発表の際に適宜コメントする。	
【成績評価】 講義中の討論内容および研究成果に基づいて総合的に評価する。	
【テキスト】 初回の講義時に受講生との話し合いで決める。	
【参考文献】 適宜、紹介する。	

組織心理学特殊研究 II	2 単位	
組織心理学特殊研究 III	4 単位	
組織心理学特殊研究 IV	4 単位	
論文指導 I / 論文指導 II / 論文指導 III		2 単位 / 2 単位 / 2 単位
増地 あゆみ		
【テーマ】 組織と個人の相互作用に関する心理学的研究の遂行		
【授業の到達目標】 本演習では、組織と個人の相互作用に関する心理学的研究を遂行し、その成果を博士論文としてまとめることを目的とする。		
【授業概要】 組織はそのなかの個人の行動や考え方に影響を及ぼす。組織のメンバーとなった個人は社会化の過程を通してその役割や立場を獲得し、組織のなかでキャリアを形成する。このとき、組織の構造や制度などのマクロな要因は個人の行動に少なからず影響する。一方、組織における個人と個人の間にもさまざまな問題が存在する。コミュニケーションや対人葛藤、インフォーマルな人間関係の問題などである。これらの個人と個人の関わりあいは組織の文化を形成している。このような組織と個人の相互作用のなかで生じる様々な問題を心理学的に研究し、その成果を博士論文として執筆する。		
【授業計画】 1. 実験・調査の実施 2. 実験・調査データの分析と考察 3. 博士論文の作成		
【準備学習の内容】 実験・調査のデータ分析に必要な統計的知識を習得し、統計ソフトの使い方に習熟しておく。		
【課題に対するフィードバック】 報告・発表の際に適宜コメントする。		
【成績評価】 講義中の討論内容および研究成果に基づいて総合的に評価する。		
【テキスト】 初回の講義時に受講生との話し合いで決める。		
【参考文献】 適宜、紹介する。		

行動意思決定論特殊研究 I 2 単位

鈴木修司

【テーマ】

意思決定に関する心理学的研究の精査

【授業の到達目標】

意思決定に関する心理学的研究から得られた知識を整理し、その現状を理解する。

【授業概要】

学生自身の希望に応じた分野の論文を読み、その概観をおこなう。そして、その成果として、総説論文の作成をおこなう。対象となる論文については、心理学的研究が中心となるが、それと関連する他分野の研究についても含める。

意思決定を巡る研究の主要な議論の1つは、合理性に関する問題である。すなわち、ヒトの意思決定は合理的であるか、否か、という問題である。従来、主に経済学を代表とする幾つかの学問分野が意思決定の合理性を主張してきたのに対して、心理学は実証研究を通して合理的ではない事実を数多く、明らかにしてきた。その合理性に関する議論には決着がついてはいないが、一つの事実として合理的な側面と非合理的な側面が意思決定には存在することは確かである。そのため、一方に偏った立場に立つことは、誤った理解に繋がりがかねない。合理性と非合理性のそれぞれが出現する条件を明確にし、その心理学的なプロセスを理解することが必要である。広範囲の文献を検討しつつ、学生自身が独自の仮説を構築できるようになることを目指す。

【授業計画】

1. 行動的意思決定概観
2. 意思決定研究の規範的アプローチと記述的アプローチ
3. 意思決定の合理性と非合理性
4. 限定合理性とヒューリスティック
5. 意思決定における情報処理アプローチ
6. 意思決定における計算論的モデル
7. 確率と不確実性の判断
8. 関係性の判断
9. リスク下での意思決定
10. 非リスク下での意思決定
11. 異時間選択
12. 多属性選択肢に対する意思決定

13. 感情と意思決定の関連性
14. 行動的ゲーム理論
15. 集団的意思決定

【準備学習の内容】

主要な準備は学生自身が対象となる論文を選定することである。そのためには、まず自分の興味や関心を明確にすることが必要である。続いて、それに関連した仮説や現象を特定することである。この段階は先行研究を整理する段階であるので、自分の関心や興味が表示される専門用語やそれに関連した研究手法を知ることが必須である。意思決定に関する研究は心理学以外に、多種多様な分野でおこなわれている。各種のデータベースを利用しつつ、適切な論文を準備するように心がけること。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

平常点

【テキスト】

特に指定しない

【参考文献】

講義内において、適宜、紹介する。

行動意思決定論特殊研究Ⅱ 2単位
行動意思決定論特殊研究Ⅲ 4単位
行動意思決定論特殊研究Ⅳ 4単位
論文指導Ⅰ/論文指導Ⅱ/論文指導Ⅲ 2単位/2単位/2単位
鈴木修司

【テーマ】

行動意思決定論に関する理論的研究と実証的研究

【授業の到達目標】

博士論文の作成に繋がるように、学生の研究活動に貢献することを目標とする。学生自身が自らのテーマに応じて研究をおこなう上で俎上に上がる多くの疑問点や補完すべき点を検討しながら、その解決ができるように努力したい。

【授業概要】

意思決定に関する心理学的内容を取り上げる。その内容には特に制限はない。博士論文の作成にとって必要なならば、心理学領域に留まらず、あらゆる領域の知見がその内容となりうる。その一方で、本講義の目標は博士論文の作成であるから、具体的な講義内容は学生自身の主体的行為によって決定される。各回の講義は担当教員からの一方的な教授ではなく、学生と教員との間の議論によって進行する。

講義ではまず、学生から自身のもつ興味や関心、検討中の仮説、進行中の実験や調査などに関する報告がなされる。それに応じて、教員側から疑問点の指摘、研究上の不足点や欠陥の整理、関連情報の提示、今後の展望についての助言などがおこなわれる。その後、互いの意見交換を通じて、議論を発展させていき、博士論文の作成にとって有益な行為としていく。

【授業計画】

- I 意思決定に関する興味・関心と研究テーマ
- II 先行研究の整理と仮説の構築
- III 研究計画と方法の立案
- IV 研究結果の整理と検討
- V 博士論文作成への展望

【準備学習の内容】

本講義の主体は学生自身であるから、学生の研究活動自体がその準備である。文献や資料を検索し、その理解に努める。自分の仮説を構築する。仮説を検証するための方法を考案する。そして、それらのために必要な行為、すべてである。学生自身が能動的に行動しなければ、何も始まらない。そのように心がけること。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

平常点

【テキスト】

特に、指定しない。

【参考文献】

講義内において、適宜、紹介する。

学習心理学特殊研究Ⅰ 2単位

佐藤 淳

【テーマ】

知識の獲得とその使用に関する研究の遂行

【授業の到達目標】

1. 知識の獲得とその使用について新たな発見を行わせる。
2. 獲得した知識を使用させる方略の開発を実証的に行わせる。
3. 知識の獲得とその使用に関する学術論文を作成させ、学術誌に投稿させる。

【授業概要】

獲得されたはずの知識が、必ずしも日常場面における具体的な問題解決に十分に利用されないことは以前から指摘がなされ、とりわけ抽象的な知識の適用を扱う学習心理学研究においては重要な問題の1つとして位置づけられてきた。中でも、ルール学習研究の領域では、正概念として提示された法則（ルール）がなぜ直後の課題にすら容易に適用されないかが、最も大きな問題として扱われ、これまでに数多くの検討が加えられてきた経緯がある。

この問題の解決を目指すことは、まず帰納と演繹という心理的な推論プロセスの解明にとって意義があると考えられる。人間が行う推論の中核をなす両者が、どのような条件下で不全の状態に陥り、そしてどのような働きかけによって促進されるのかを明らかにすることは、思考過程そのものの成り立ちと特徴とを描き出すことでもある。また、社会のさまざまな場面で伝えられる知識は、そのほとんどが一般化、抽象化されているといえるが、もし伝えたはずの知識が問題解決にまったく使用されなかったり、その適用範囲がきわめて限定的であったりした場合は、極端な言い方をすれば、その知識の伝達行為は無に帰してしまう恐れすらあると言える。それゆえ、この問題の解決は、職場や学校をはじめとする多様な教育場面においても重要な課題になるといえる。

本講義では、このような抽象的知識の不適用問題を扱ったこれまでの心理学研究を網羅的に精査することによって、新たな問題の発見へとつなげていく。

【授業計画】

第1回：関連する先行研究の検討（論文の収集と講読

1)

- 第2回：関連する先行研究の検討（論文の収集と講読2）
- 第3回：関連する先行研究の検討（論文の収集と講読3）
- 第4回：知識の獲得とその使用に関わる問題の発見と設定1
- 第5回：知識の獲得とその使用に関わる問題の発見と設定2
- 第6回：知識の獲得とその使用に関わる問題の発見と設定3
- 第7回：研究仮説の導出1
- 第8回：研究仮説の導出2
- 第9回：調査・実験方法の検討1
- 第10回：調査・実験方法の検討2
- 第11回：調査・実験方法の検討3
- 第12回：調査・実験結果の分析1
- 第13回：調査・実験結果の分析2
- 第14回：調査・実験結果の分析3
- 第15回：学術論文の作成と投稿（1本目）

【準備学習の内容】

1. 先行研究となる学術論文の収集を網羅的に行っておくこと。
2. 調査・実験の結果の分析に必要な統計的知識と手法を身につけておくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

研究の進捗と研究成果の社会的な有用性の程度を勘案して総合的な評価を行う。

【テキスト】

とくに設定しない。

【参考文献】

その都度示唆する。

【その他】

主として履修者の研究計画に担当者が研究指導する形で進める。

学習心理学特殊研究Ⅱ 2単位
 学習心理学特殊研究Ⅲ 4単位
 学習心理学特殊研究Ⅳ 4単位
 論文指導Ⅰ/論文指導Ⅱ/論文指導Ⅲ 2単位/2単位/2単位

佐藤 淳

【テーマ】

知識の獲得とその使用に関する研究の遂行

【授業の到達目標】

1. 知識の獲得とその使用について新たな発見を行わせる。
2. 獲得した知識を使用させる方略の開発を実証的に行わせる。
3. 知識の獲得とその使用に関する博士論文を作成させる。

【授業概要】

本講義では、知識の獲得とその使用に関する具体的な心理学的研究を遂行させ、以てそれらを博士論文としてまとめさせることを目標とする。

ここで扱う抽象的知識の不適用問題の発生メカニズムに関する従来の見解は、大きく分けて3つある。1つは自成的につくられる誤概念体系の存在が及ぼす妨害的な影響を指摘する見方であり、2つめは知識の伝達場面で提示される事例の個別学習による限定的な推論を指摘する見方である。そして3つめは、伝えられた知識に反する抽象命題にも一定の妥当性を付与して、問題解決の際に判断を依拠させる命題をひとつに確定しない「判断の不確定性」の存在を指摘する見方である。

ここでは、それら従来の見解によって説明することが難しい人間の問題解決行動に着目し、その成り立ちに検討を加えることによって、さらに新たな説明概念を構築することを試みる。その上で、次にその新たな説明を踏まえた場合、より適切的な知識適用の促進方略とは何かについて検討を加え、新たな方略の開発を目指す。

【授業計画】

- 第1回～第3回：関連する先行研究の検討（論文の収集と講読）
- 第4回～第6回：知識の獲得とその使用に関わる問題の発見と設定
- 第7回～第8回：研究仮説の導出
- 第9回～第11回：調査・実験方法の検討
- 第12回～第14回：調査・実験結果の分析
- 第15回：学術論文の作成と投稿（2本目）
- 第16回～第18回：関連する先行研究の検討（論文の取

集と講読)

第19回～第21回：知識の獲得とその使用に関わる問題の発見と設定

第22回～第23回：研究仮説の導出

第24回～第26回：調査・実験方法の検討

第27回～第29回：調査・実験結果の分析

第30回：学術論文の作成と投稿（3本目）

第31回～第33回：関連する先行研究の検討（論文の収集と講読）

第34回～第36回：知識の獲得とその使用に関わる問題の発見と設定

第37回～第38回：研究仮説の導出

第39回～第41回：調査・実験方法の検討

第42回～第44回：調査・実験結果の分析

第45回：学術論文の作成と投稿（4本目）

第46回～第55回：これまで執筆した論文を踏まえた討論と得られた知見の整理

第56回～第75回：博士論文の執筆

【準備学習の内容】

1. 先行研究となる学術論文の収集を網羅的に行っておくこと。
2. 調査・実験の結果の分析に必要な統計的知識と手法を身につけておくこと。
3. 学術誌に論文を3本以上掲載しておくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

研究の進捗と研究成果の社会的な有用性の程度を勘案して総合的な評価を行う。

【テキスト】

とくに設定しない。

【参考文献】

その都度示唆する。

【その他】

主として履修者の研究計画に担当者が研究指導する形で進める。

発達心理学特殊研究 I

2単位

小島 康次

【テーマ】

現代社会における複雑系人間発達論——キャリア発達のダイナミクス

【授業の到達目標】

複雑系に関する一般理論を学習し、それが人間と社会組織の発達をどのように説明するかを理解する。

【授業概要】

複雑系人間発達論のメカニズムを基本として、現代人の精神発達を資本主義社会におけるコミュニケーションとイノベーションに基づく自己組織化と考える。知るとはどのようなことかを動態として、また、開放系における変化として捉える方法の検討を通じて、認識を近代的な理性の産物とする偏見から脱却する試みである。社会の活性化の水準をコミュニケーションのレベルにおいて計る観点を取ることで、キャリア発達の背後にあるアイデンティティ形成の問題も新たなアプローチが可能になると考えられる。

【準備学習の内容】

複雑系に関する基礎的文献を予め指定するので、熟読し自分なりの意見をもって授業に臨むこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【テキスト】

アクセルロッド, R.(寺野隆雄監訳) 2003 対立と協調の科学——エージェント・ベース・モデルによる複雑系の解明——ダイヤモンド社

【参考文献】

今田高俊・鈴木正仁・黒石晋 2001 複雑系を考える——自己組織性とはなにかII——ミネルヴァ書房
エリクソン, E.H.(岩瀬庸理訳) 1973 アイデンティティ——青年と危機——金沢文庫
カウフマン(米沢富美子監訳) 1999 自己組織化と進化の論理 日本経済新聞社
金子勝・児玉龍彦 2004 逆システム学——市場と生命のしくみを解き明かす 岩波新書
シャイン, E.H.(松井寶夫訳) 1981 組織心理学 岩波書店
ブリゴジンとスタンジェール(伏見康治・伏見譲・松枝秀明訳) 1987 混沌からの秩序 みすず書房

認知心理学特殊研究 I 2 単位

浅村亮彦

【テーマ】

認知過程理論とその応用に関する研究の精査

【授業の到達目標】

人間の認知過程に関する具体的な研究課題を定め、研究仮説を設定すること。

【授業概要】

医療機関、建設・土木などのさまざまな作業現場において、ヒューマンエラーに起因する事故や事故に至りかねない事例は少なくない。ヒューマンエラーの特性を解明し、それに基づいた教育訓練を開発することによって、事故を防止することが社会的に求められている。そのヒューマンエラーに関与する様々な要因のうち、ここでは、注意のコントロール、メンタルモデル形成過程などの認知過程の特性と、メタ認知や認知的失敗傾向など、認知過程の個人差の影響から、ヒューマンエラーの発生過程を考察する。また、認知過程の個人差に基づく教育訓練法についても考察する。これらの考察に関連する先行研究を収集、読解した上で、具体的な研究仮説を設定する。

【授業計画】

1. 研究仮説に関連する先行研究の収集と整理
2. 研究仮説の設定
3. 調査または実験計画の具体化

【準備学習の内容】

人間の認知過程に関する研究動向を調べ、最新の研究成果について、その概要を理解しておくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

研究の進捗状況に基づいて総合的に評価する。

【テキスト】

受講者と相談の上、指示する。

【参考文献】

受講者と相談の上、指示する。

認知心理学特殊研究 II 2 単位
認知心理学特殊研究 III 4 単位
認知心理学特殊研究 IV 4 単位
論文指導 I / 論文指導 II / 論文指導 III 2 単位 / 2 単位 / 2 単位

浅村亮彦

【テーマ】

認知過程理論とその応用に関する研究の遂行

【授業の到達目標】

人間の認知過程に関する具体的な研究課題について、独自の研究仮説を設定・検証し、その成果を博士論文としてまとめること。

【授業概要】

ヒューマンエラーに関わる独自の研究仮説を設定し、注意のコントロール、メンタルモデル形成過程などの認知過程の特性による影響と、メタ認知など、認知過程の個人差の影響から、ヒューマンエラーの発生過程モデルを設定し、その妥当性を実験的に検討する。さらには、メタ認知の個人差に基づいた、ヒューマンエラー低減訓練法を開発し、その有用性も検証する。これらの研究に関わる実験あるいは調査の実施、成果の公表を行なった上で、それらを博士論文として執筆する。

【授業計画】

1. 調査または実験の計画と実施
2. 研究成果の公表
3. 博士論文の執筆

【準備学習の内容】

受講者自身の研究仮説に関する研究動向を調べ、最新の研究成果について、その概要を理解しておくこと。

【課題に対するフィードバック】

報告・発表の際に適宜コメントする。

【成績評価】

研究の進捗状況に基づいて総合的に評価する。

【テキスト】

受講者と相談の上、指示する。

【参考文献】

受講者と相談の上、指示する。